（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	四方朱子
論文題目	大江健三郎文学に於ける「かたり」の戦略 ―　『個人的な体験』を中心に　―		

（論文内容の要旨）

本論は、大江健三郎の『個人的な体験』が、いかにモノローグ的な語りを用いてその「個人」性を効果的に担保しているかを論じつつ、この小説後の大江の小説が転機を迎えるダイナミズムを考察している。特に、「私小説」ではないと語りつつも「私小説」性を担保しているふるまいにどのような戦略があるのかを、大江の小説の語りと構成を中心に分析している。

大江健三郎の小説は、文壇デビュー当初から、大江作品への批評自体が、大江自身の主張や公開された部分のライフスタイルに影響され、その枠に沿った批評か、逆に大江という有機的な存在の思想やライフスタイル自体への反論へと向かう批判より外に発展しない傾向も見られた。『個人的な体験』は、そのような批評にさらされた大江テクストの一つである。本論は、このテクストがそもそもなぜそのような傾向をもって語られてしまうのか、またそう語られることをテクスト自体がどう利用しているのかを、テクストの語りを中心に分析することで整理している。

第一章では、初期短編「他人の足」を取り上げ、このテクストが障害の当事者というアイデンティティからの発話を採用している、つまり物語の語り手自身が障害の当事者であるという独自性に焦点を当てている。更に、このテクストでは、発表当時には、限りなく不治に近かった「脊椎カリエス」という病が、不治ではなくなって来ていたというそのダイナミズムが、巧みに物語の転機として取り入れられていることを指摘する。しかし反面、この実在の障害は、一方でテクストに表象されるものとして、差別的な象徴性を残したままであり、そこに横たわる問題性や差別的な外部からの視線について顧みられることがない。つまり脊椎カリエスという障害は、このテクストに於いては、象徴的、比喩的な集団を示す記号の枠を出ているのか、脊椎カリエスの「当事者」の個性の表出に至っているのかに関して、疑問が残るとも指摘している。

第二章では、このような一般化から脱する為に、テクスト自体が、集団になりきれない個を描き出そうとする過程と、それに伴い差別性を持ってしまう可能性について、『個人的な体験』の語りにまず目を向け、このテクストが「他人の足」とは異なり、三人称で語られているにもかかわらず、モノローグ的な性質を多分に持つものであることを確認する。『個人的な体験』は、〈鳥〉の主観的な視点からの周囲の描写が続き、〈鳥〉に共感するか、もしくは少なくともその主観的視点を受け入れずに読み進めることはできないような構造を持つテクストである。そして、そのモノローグ的な語りが、固定された価値観を持っており、男性性のヒエラルキーを崩すことが出来ていないことを示し、「道徳」小説的ポーズが批判対象となってきたこのテクストが、なぜそのような批判を引き受けてしまうのかを、あえて大江という生身の作者の情報を導入せず、その語りがはらむ差別的ヒエラルキーを整理することで分析している。

第三章では、『個人的な体験』の２年前に発表された短編「不満足」を取り上げる。「不満足」と『個人的な体験』という２つのテクストは、「不満足」によって『個人的な体験』を補完する関係として取り扱われがちである。本論は、それによって取りこぼされてしまう「不満足」の独自性に注目し、特にその語りが、第一部から第二部に移る過程で、一人称から三人称へと移行する点を指摘している。そして、署名された作者大江健三郎の発言という、一見有機的なつながりによって後押しされて、大江自身によるこの２つのテクストへの「自己言及＝自己解説」は、事後的な意味付けという意味で、まさに「不満足」での〈鳥〉による〈少女〉の「強姦」と相同的な言説となっていることを指摘する。

第四章では、再び『個人的な体験』の構成を分析する。特に〈火見子〉に焦点化された語りに注目し、従来無視されるかエラーとして扱われがちであった語りのブレと、〈火見子〉の語る「多元的宇宙論」を交差させることで、その一瞬の焦点化のブレが与える読みの可能性について論じる。また、同様の語りの焦点化のブレを持つ田山花袋の『蒲団』の受容のされ方を比較検討することで、『個人的な体験』が、自らの小説を「私小説ではない」と語りつつ、返す刀でたとえば「光、アカリのモデルとなった息子ですが」等と語るなど、私生活に身近に絡むものをモデルにしながら小説を書いているとアピールしながらも、その小説は「私小説」ではないと同じ文で繰り返すという戦略性を持つことから、『個人的な体験』が大江の転機的小説であると論じる。

第五章では、『個人的な体験』の結末とは逆に子供を殺してしまう父親が出てくる「空の怪物アグイー」という、『個人的な体験』の約半年前に発表された短編の存在について考察する。また、もっぱら大江の転換期と位置づけられることの多い『個人的な体験』というテクストの存在意義を、改めて近代文学の流れの中で捉え直すため、夏目漱石の『こころ』と、ヘンリー・ジェイムズの “The Turn of the Screw” を援用し、それらを交差させつつ分析する。『個人的な体験』の発表後、大江は私小説に倣うかのような小説を多産することになる。これを、大江の日本近代文学への回帰といえる小説技法的「転向」ととらえることについて考察する。

第六章では、作者であることを最大限利用し、公言しつつ自分の過去の作品を自己引用して語り直すという手法を採る『懐かしい年への手紙』を中心に、この小説が『個人的な体験』を自己引用することについて分析する。『懐かしい年への手紙』に於ける自己引用は、テクストの様々な水準で自己の統一性を揺るがすこととも密接に関連している。『懐かしい年への手紙』は、それ自身の存在によって、テクストとしての自身を解体し、さらにその解体の手付きをも露呈し、常に「読まれる／見られる」ことを意識し続ける構造を持った循環するテクストとして存在していると論じる。

第七章では、『キルプの軍団』を中心に、自己引用だけでなく、外部の実在するテクストを自己のテクスト内で独自に読み替えつつ構築されるもう一つの物語が、どのように現実と絡み合うのかについて考察し、大江の小説が、『個人的な体験』後、自らのテクストや、私小説的な自己引用などだけでなく、外部の世界すらそのテクストに引き込んで解釈してみせることで、有機的な多面性を持ち得る可能性を考察している。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論は、大江健三郎が『個人的な体験』においてモノローグ的な語りを用いてその「個人」性をいかに効果的に担保しているかを論じ、この小説後の大江の小説が転機を迎えるダイナミズムを考察する論文である。特に、大江自身がこの小説について「私小説」ではないと言いつつ「私小説」性を担保しており、そこに作家のどのような戦略があるのかを、小説の語りと構成に焦点を当てて分析している点に新しさがある。大江の小説は、デビュー当初から江藤淳などの大物評論家らが追認してきたことも追い風となり、メインキャラクター＝作者「大江健三郎」という図式や、それに陥らないまでも、大江本人の私生活と対照して、本人のモラルや価値観、世界観をもって小説を評価し、限定する傾向があった。本論文では、『個人的な体験』がなぜそのような傾向をもって語られるのかを論じる。

第一章では、大江の初期短編「他人の足」を取り上げ、物語の語り手自身が障害の当事者であるという独自性に焦点を当てる。障害者の語り手がその障害を持つ集団の一員である限り、彼らの純潔な関係性は守られる要因として描かれているに過ぎず、その問題性や外部からの差別的な視線について顧みられないという指摘、また障害が、このテクストに於いて象徴的、比喩的な集団を示す記号の枠を出ておらず、脊椎カリエスの「当事者」の個性の表出に至っているのかについて疑問を呈している点など、申請者の鋭い読みをうかがわせる。

第二章では、大江の中期の代表作『個人的な体験』の語りに目を向け、この語りが「他人の足」とは異なり、三人称で語られているにもかかわらず、モノローグ的な性質を多分に持つことを指摘する。さらに『個人的な体験』では〈鳥〉とそのモノローグ的な語りが固定された価値観を持っており、読者はその主観的視点を受け入れずに読み進めることができない構造を持つテクストである、とする。また、「道徳」小説として批判されてきたこの小説が、なぜそのような批判を引き受けてしまうのかを、小説の語りがはらむ差別的ヒエラルキーを分析しつつ解明している。

第三章では、『個人的な体験』の２年前に発表された短編「不満足」をとりあげ、「不満足」における「成長」というイメージが後発の『個人的な体験』で改めて確認されることにより強化されると見られる傾向に注目する。申請者は、このような傾向により見落とされがちな「不満足」の独自性に注目し、その語りが、第一部から第二部に移る過程で、一人称から三人称へと移行する点などを分析している。大江自身によるこの２つの小説への「自己言及＝自己解説」によって、事後的な意味付けがなされているという指摘にも、申請者の読みの確かさをうかがわせる。

第四章では、再び『個人的な体験』の構成に注目し、〈火見子〉に焦点化された語りを分析する。特に、従来重視されてこなかったその語りのブレを〈火見子〉の語る「多元的宇宙論」を交差させることで、その一瞬の焦点化のブレが与える読みの可能性について分析した。また、同様の語りの焦点化のブレを持つ田山花袋の『蒲団』の受容のされ方を比較検討し、『個人的な体験』について大江が、私生活の身近に絡むものをモデルにしながら小説を書いているとアピールしつつ、その小説は「私小説」

ではないと繰り返す、という戦略性を持つことを明らかにし、『個人的な体験』が大江健三郎の転機的小説と言えることを分析した。申請者の知見がいかんなく示されている章と言えよう。

第五章では、『個人的な体験』の約半年前に『新潮』に発表された短編「空の怪物アグイー」（『個人的な体験』の結末とは逆に、子供を殺してしまう父親が出てくる小説）を扱う。そして、大江文学の転換期と位置づけられることの多い『個人的な体験』の存在意義を、近代日本文学の流れの中で改めて捉え直そうと試みる。また、夏目漱石の『こころ』と、ヘンリー・ジェイムズの “The Turn of the Screw”の語りの構造を比較対照させつつ分析している。『個人的な体験』の発表後、大江は私小説に倣うかのような小説を多く書くが、申請者はこれを、大江が日本近代文学への回帰といえる小説技法的「転向」をしたととらえる読みを展開する。対象とする作品の幅（英米小説、近代日本文学）が広い割には扱う作品が少なく、申請者の論はやや説得力に欠けると言わざるを得ない。

第六章では、『懐かしい年への手紙』が『個人的な体験』を自己引用することについて分析した。『懐かしい年への手紙』が、それ自身の存在によってテクストとしての自身を解体し、さらにその解体の手付きをも露呈し、常に「読まれる／見られる」ことを意識し続ける構造を持った循環するテクストとして存在していることを指摘する申請者の読みは説得力を持つ。

第七章では、『キルプの軍団』を中心に据え、子供が大人からテクストの読み方を教育されるという手続きを取りつつそのテクスト自身が進行する形式について考察する。そして大江の小説が、『個人的な体験』後、自らのテクストや、私小説的な自己引用などだけでなく、外部の世界すらそのテクストに引き込んで解釈してみせることで、有機的な多面性を持ち得る可能性について論じている。

本論文の分析対象は、大江健三郎の文学全体についてのみならず田山花袋、夏目漱石などの近代日本文学、さらにはアメリカ人作家ヘンリー・ジェイムズの作品などにも及ぶ。「焦点化」や「かたり」などの定義が明確でない、論じる対象作品が少ないなど、論文として惜しまれる点があることは事実である。また、文章が冗長で、明快な論理を展開しているとは言い難いという弱点も見られる。しかし本論文には、大江文学について多年にわたり考察してきた申請者独自のいくつかの知見が見られる。また幅広い視野から書かれた本論文は、大江文学の研究に大きく貢献すると思われる。その意味で、共生人間学専攻思想文化論講座の理念に十分適う優れた研究である。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和２年１月１７日、論文内容と要約、およびそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版刊行上の支障がなくなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降